

[氏名] 三村 尚彦

[専門分野] 哲学(現象学)



新入生へのひとこと

「哲学」と聞くと、日常生活ではほとんど用いることもないような言葉で抽象的な問題を考える学問といったイメージが浮かぶかもしれない。実際そうした側面はある(例えば、カントは『純粋理性批判』においてア・プリオリな総合判断はいかに可能かという問題を考えたなど)。しかし同時に哲学には、身近なものを徹底的に考察するという面もある。私たちには身近すぎてこれまでほとんど考えたことがない事柄がたくさんある。そうした問題を「そんなことは常識だから」、「考えなくても何の不都合もないのだから」という言い方で納得せず、とことん突き詰めていくことも、哲学である。大学という主体的に自由な時間を過ごすことのできる場で、哲学的に考察するおもしろさを体験してほしい。

講義のテーマと内容

第1回: 現象学との出会い

「君が現象学者だったらこのカクテルについて語れるんだよ、そしてそれは哲学なんだ」(ボーヴォワール『女ざかり』125頁)。この講義は、カント認識論に挫折して、現象学によって救われた男のドキュメンタリーである。

わたしは学部での卒業論文以来、一貫してフッサールという哲学者が創始した現象学を研究している。その出発点は、認識論への関心からであるが、上記のように、カント哲学を志したものの投げ出した(挫折した)という経緯もある。本講義では、認識論的な問題がわれわれの日常生活とどのように関わっているのか、現象学はそれに対してどのように考える哲学であるのかを、示したい。

第2回: 心理療法と現象学

第1回目で紹介したわたしの専門分野である「現象学」は、社会学や心理学などに方法として適用されて、現象学的社会学、現象学的心理学、現象学的美学といった領域も存在する。第2回目の講義では、臨床心理学における技法(フォーカシング)の理論的基盤として、現象学を応用したユージン・T・ジェンドリンの思想を紹介し、哲学と心理学の関係について概説していく。

リレ - 講義の参考文献

第1回分

現象学の入門書としては、
谷徹『これが現象学だ』講談社現代新書 1635、2002年。

フッサールの著作で、比較的読みやすいのは、
フッサール(立松訳)『現象学の理念』みすず書房、1982年。

認識論という哲学分野が何を問題にしているのかをわかりやすく説明しているのは、
戸田山和久『知識の哲学』産業図書、2002年

担当者が3回生の時に挫折したカント哲学の入門書としては、
黒崎政男『カント『純粋理性批判』入門』講談社選書メチエ 192、2000年をお勧めする。

第2回分

フォーカシングや体験過程理論の概略を知るには、
ジェンドリン『フォーカシング』村山訳、福村出版、1982年、
池見陽『心のメッセージを聴く - 実感が語る心理学 - 』講談社現代新書 1241、1995年、の2冊を。

心理学と哲学の関係については、
渡辺・村田・高橋『心理学の哲学』北大路書房、2002年が、全体像がつかみやすい。

二 回 生 以 降 に 展 開 さ れ る 授 業 内 容 (予 定)

せっかく興味をもって、いざ哲学書を読んでみようとするすると抽象的な概念に馴染めず、途中で投げ出してしまふ人が多い。しかしながら多くの哲学は、人間が日々体験している現実に立脚して思索を展開している極めて具体的な営みでもある。私の講義内容はたえず、その点をふまえて行うように心がけている。つまり、なるべく身近な例を挙げて、わかりやすく内容を提示している。

これまで2・3年次生の講義・演習科目で扱ってきた内容には、次のようなものがある。

哲学概論 a/b: いくつかの代表的なトピックを取りあげて、哲学史の中でそれらの問題がどのように考えられてきたのかを概説する。テーマは、知識・自己と他者・時間・言語・身体・歴史・存在・科学など。

西洋近代哲学 a/b: 西洋近代というトピックを考えるにあたって、「自然科学」の存在を枠外に置くことはできないだろう。知のあり方に対してたえず反省的なまなざしを向ける哲学は、「自然科学」という知にどのような態度を取ってきたのかを考えていく。まず、デカルトに注目して、彼の自然学、形而上学と近代自然科学の関係について検討する。次にイギリス経験論、特にヒュームを取りあげながら因果性の問題を考える。

こころと身体を哲学する: 心と身体というトピックは、古代から一貫して哲学の中心的な問題の一つであった。しかし現代においては、心は心理学、身体は生理学によって解明されるという一般的な理解が形成されている。さらには脳という身体器官の研究が同時に心解明しているとする見解も、強まってきている。こうした状況にあって、心と身体をめぐる哲学的考察とは、何をすることなのだろうか。この問いへの解答を、「心の哲学」や認知科学の内容も盛り込みながら、探っていく。

専門分野の紹介

専門分野は、先のページで記したように、フッサール現象学だが、最近ではジェンドリンの体験過程理論についても取り組んでいる。現象学では、特に心身問題（こころと身体の関係や、認知科学への応用の可能性）に関心があり、ジェンドリン哲学については、心理学研究者との共同研究を行っている。これらに関しては、リレー講義でより具体的に説明する。

またわたしの卒論ゼミの学生が、取り組んでいるテーマは、フッサール現象学や科学哲学関係（人工知能論、心の哲学など）の他、現象学の方法を取り入れたファッション論（モード論）も多い。どのような服を身につけるかは、自分自身のあり方に変化をおよぼしたり、他者からの認知のされ方が違うものにしたりする。さらにファッションは、身体に文化的意味を浸透させる装置としても機能している。したがって、単にファッション現象の事実的な変遷を追うのではなく、その背後で働いている機能を問うことは、哲学的な思索になる。

その分野を知るためのおすすめの本

心身問題

哲学における心身問題全体の見通しを得るためには、以下の書がわかりやすい。

S.ブリスト『心と身体の哲学』河野ほか訳、勁草書房、1999年

脳科学の成果にもとづいて、心にアプローチしようとする傾向が近年ますます強くなっている。その流れを受けて、

哲学的に心身問題を考察するのが、「心の哲学」である。代表的な入門書・解説書としては、

信原幸弘編『シリーズ心の哲学 人間篇』勁草書房 2004年

柴田正良『ロボットの心：7つの哲学物語』講談社 2001年（講談社現代新書 1582）

などがある。

ファッション哲学・モード論

ファッションやモードに関する哲学的・現象学的な考察を展開している鷲田清一の代表的な著作を2冊、

鷲田清一『ちくはぐな身体』ちくま文庫、2005年

鷲田清一『モードの迷宮』ちくま文庫、1996年

さらに、ファッションと身体の関係については、

成実 弘至 編『モードと身体』角川学芸出版、2003年

北山晴一『衣服は肉体になにを与えたか 現代モードの社会学』朝日新聞社、1999年

バーナード・ルドフスキー『みっともない人体』加藤・多田訳、鹿島出版会、1979年

などが参考になるだろう。